様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 13 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：２３８２００２５

研究課題名（和文）　ラテン語の名詞形態法に見られる諸特徴の歴史言語学的研究

研究課題名（英文）　A Historical Approach to Some Features in Latin Nominal Morphology

研究代表者
西村　周浩（NISHIMURA KANEHIRO）
京都大学・白眉センター・特定助教
研究者番号：50609807

研究成果の概要（和文）：ラテン語は印欧語族に属する言語であるが、印欧祖語に再建される複雑な名詞形態法を大幅に単純化している。しかし、他の印欧諸語との比較によって、古い時代の形態的痕跡の一部が明らかとなり、その一方でラテン語内部において生じたよく似た手法が一定の汎用性をもつに至っていたことが判明した。また、しばしば印欧語な形態法によって説明されようとしていたある神格名詞が、ラテン語内部の特殊な形成であることが分かった。

研究成果の概要（英文）：Though Latin is a language that belongs to the Indo-European (IE) family, its nominal morphology is remarkably simplified from the state reconstructed in Proto-Indo-European. However, by means of the comparison with the other IE languages, I succeeded in identifying some relics of an old morphological process, on the one hand, and on the other hand, clarifying the fact that a similar process arisen in Latin came to enjoy some productivity. Further, for a noun that stands for a Roman deity, I proposed a new historical scenario particularly developed within Latin, whereas it has often been treated from the IE standpoint.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：延長階梯、異分析、民間語源

１．研究開始当初の背景

18 世紀末、インドの古典語サンスクリット語がギリシア語やラテン語などヨーロッパの諸言語と共通の祖先をもつという仮説がイギリス人文献学者 W. Jones によって提唱されて以来、様々な言語を対象に音韻・形態・統語法の比較研究が行われ、その結果得られた構造的な対応関係から、「印欧（インド・ヨーロッパ）語族」が言語の一系統として確立。言語変化の規則性や方向性も理解され、紀元前 4000 年頃に話されていたとされる印欧祖語の再建、特定語派・言語の内的歴史の構築は、現在も世界中の研究者によって続けられている。

中でも、印欧語族の名詞形態法の研究は1970年代から急速な発展を遂げるに至り、その速度は今もなお衰える気配がない。学界におけるこうした一つの流れに刺激を受けて、私自身、印欧語族、とりわけラテン語を含むイタリック語派の名詞形態法に対して強い関心をもつに至った。

２．研究の目的

印欧語族研究において、古代イタリア地域で話されていたイタリック語派は、重要な研究対象として世界中で常に関心を集めてきた。語派の代表格であるラテン語は、紀元前およそ600年以降、碑文や写本など豊富な資料を提供しており、その科学的・実証的研究が本格化した19世紀以降、原典校訂版・碑文集・文法書・語源辞典など様々な成果が積み上げられてきた。その精度は今世紀に入っても向上を続けている。

このようにラテン語を含めたイタリック語派研究が国際的に発展を遂げる中、私も、イタリック諸語がどのような発展の結果言語としてその姿に至ったのか、その解明に努めてきた。イタリック語派は、印欧祖語に再建される形態法の少なからぬ部分を後の改変によって単純化させている。この点は、同じ印欧語族の中でも顕著な保守性を有するインド・イラン語派、ギリシア語、アナトリア語派とは大きく異なる。しかし、だからと言って、イタリック語派の名詞形態法を研究対象とすることの意義が低下することはない。むしろ、印欧祖語および保守的な諸言語との比較によってイタリック語派がどのように形態法を変化させたのか、そのプロセスに迫るという試みは、本件が前面に打ち出す研究上の特色であり、また同時に研究目的であった。

３．研究の方法

ラテン語をはじめとするイタリック諸語がどのような発展の結果言語としてその姿に至ったのか。その解明に際して私が基本方針としているは、(a) イタリック諸語が他の印欧諸語と異なる点を探り、その差異を生み出す言語変化の仕組みをつきとめる、(b) イタリック諸語内部の構造上の不規則性を発見し、その動機づけを行う、というものである。ラテン語の名詞形態法を考える場合もこの方針に変わりはない。

本件は、研究課題に含まれる「形態法」という表現からもうかがえるように、言語学全体から見通すと形態論の領域に属すると言える。したがって、研究方法の出発としては、どのような語形を分析の対象とするか見極めることであった。そして、その基準に基づき、議論を進めるに必要十分なデータを整えることが次のステップであった。

しかしながら、形態論の問題がその領域内部での考察だけで解決するわけではない。隣接する部門との互恵的な分析を通して浮かび上がってくる事実は数多くある。形態論という領域がもつ、他部門との関係性は、本件においても研究の効率を上げるための鍵として、積極的に活用された。

４．研究成果

（１）印欧祖語には様々な文法カテゴリーにおいて語根の長母音（いわゆる延長階梯）を際立った特徴とする形態法が存在したと考えられており、サンスクリット語やギリシア語のデータがその重要な根拠となっている。これに対して、ラテン語は音韻・形態の両面から延長階梯を用いる手法をほとんど放棄してしまっており、印欧祖語からほぼ直接引き継いだと思われるものはごくわずかである。しかしながら、ある一群の語根から派生された名詞あるいは形容詞には、長母音の使用が頻繁に観察される。これらの語根は、ラテン語内部において、過去分詞などを派生する際に生じる音の配列が引き金となって、規則的に長母音を示すことが知られている（いわゆる Lachmann の法則）。この音韻規則、あるいはそれに類するものがきっかけとなって、特定の語根に由来する名詞・形容詞が自動的に長母音をもつに至ったと考えられる。

本件では、特に、英語の名詞 *suspicion* の語源にもなっているラテン語の *suspīciō*「疑い」の形成法について研究を進め、論文として発表した。この名詞は、語中に*-ī-*という長母音を示しており、その由来が問題となる。先行研究において、しばしば**sub-spēkiō* という前段階が想定され、後部要素を *speciō*「見る」に含まれる語根の延長階梯を伴う異形態が根底にあると考えられてきた（第2音節における**-ē-* > *-ī-*は、第3音節の*-i-*に起因する同化現象と解釈）。しかし、接頭辞に後続する位置で語根がそのような延長階梯を示すことは印欧語の名詞形態法に照らすと考えにくい。

そこで私は解決の糸口を *suspectus*「疑わしい」という意味的にも語源的にも関連する形容詞に見出した。この形式の本来の語形成は *su-spectus* にように分析される。*su-*は「下」を意味する接頭辞であり、*-spectus* は上で言及した *speciō*「見る」の過去分詞である。しかし、この形容詞は語源とは異なる擬似的な解釈も可能で（いわゆる異分析）、*sus-pectus* のように分節されると、*sus-*は *su-*の変異形、後半の*-pectus* は語源的に無関係な動詞 *pangō*「配置する、仕組む」の過去分詞の一形式として再解釈されうる。*suspectus* が用いられる文脈を入念に調べると、「ひそかに仕組まれた」という解釈が可能な箇所が数多く見つかり、「疑わしい」という意味と紙一重のよう

な差を示す。こうしたことが背景となって、ラテン語の話者たちの間で実際に異分析のプロセスが進み、*pangō* との二次的な関連付けが形成されたと考えられる。この動詞 *pangō* のベースとなっている語根はその派生語において長母音を頻繁に示す。この特徴が *suspectus* を媒介して *suspīciō* にも広がったものと私は結論付けた。

suspīciō の分析に役立った、長母音を示すほかの名詞・形容詞についても、今後さらに詳細に分析を展開していく素地が、本件の研究を通じて整った。

（２）古代ローマの神格名称で、英語の「火星」を意味する形式の語源でもあるラテン語 *Mārs* には、*Māvors* という別形が存在している。伝統的に *Māvors* の方が古い形とされ、*Mārs* はそこから音変化を経た結果生じた語形である考えられてきた。そのため、*Māvors* という長い語形を、比較言語学の観点から、他の印欧諸語の語、例えばサンスクリット語の神格名称やギリシア語の一般名詞などと関連付けようとする試みが繰り返し行われてきた。

しかし、紀元前 4 世紀という非常に古い時代のラテン語碑文に **MARS** という語形がすでに在証され、さらに周辺のイタリック諸語にもこの形式が見られることから、ほぼ同時代の語形である *Māvors* は、この神格に対する宗教上の特別な思いから、二次的に作り出された可能性が浮かび上がってきた。実際に、ローマの文学作品において、*Māvors*、あるいはその派生形容詞が用いられている文脈を詳しく調べてみると、マルス神に向けた祈りが唱えられていたり、強い畏怖の気持ちが表現されていたりするなど、顕著な宗教的感情の発露が見られる。

では、いかなる要因で *Māvors* という語形に至ったのか。具体的には、なぜ *Mārs* の語中に*-vo-*という要素を付け足すような形態的な操作が行われたのか。マルス神は古代ローマでは都の伝説上の創建者である人物の父親として重要な地位を占めていた。そのことが、ギリシア神話で最高神の地位にあり、ローマでも特別な崇拝の対象であったユッピテル *Iuppiter* 神（＝ ゼウス）に、人々がマルス神をいわば格上げによって近づけようとした可能性がある。実際、文学作品には、この二柱の神格を並列した表現がしばしば見られる。*Iuppiter* はその語形変化の中で、主格以外は規則的に*-v-* [-w-]の音を示す。このことが、*Māvors* に見られる*-v-*の音を促した可能性がある。さらに、ラテン語の音韻の歴史を紐解くと、*-āvo-*が*-ā-*へと母音融合する変化が知られている。このパターンの変化前・後の状態は新旧の語形として両方が同時代に用いられているケースもある。*Māvors* の*-v-*の後に*-o-*の母音が現れたのはこうした事情によるものと考えられる。そして、以上のような後押しがあったことで、古代ローマの時代から、*Māvors* という語形を *magna + vertō / vertō*「大きな事柄をひっくり返す（神）」と恣意的に解釈した、いわゆる民間語源と相俟って、*Māvors* が特殊な存在感をもつに至ったと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Nishimura, Kanehiro. 2013. On the Phonological Mystery in Latin *suspiciō*: A Trick of *suspectus*? *Tokyo University Linguistic Papers* 33 = *Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto*, ed. T. Hayashi, et al., 187-203. Tokyo: Department of Linguistics, University of Tokyo. 査読無. http://hdl.handle.net/2261/53474

② Nishimura, Kanehiro. 2012. Review, S. Van Laer: *La préverbation en latin: étude des préverbes* ad-, in-, ob- *et* per- *dans la poésie républicaine et augustéenne*. *The Classical Review* 62: 479-481. 査読無.
DOI: 10.1017/S0009840 X12000662

③ Nishimura, Kanehiro. 2011. A phonological factor in *Mārs'* lexical genealogy. *Rivista di glottologia* 5 = *Atti del Convegno Internazionale "Le lingue dell'Italia antica: iscrizioni, testi, grammatica" in memoriam Helmut Rix (1926-2004), March 7-8, 2011, Libera Università di Lingue e Comunicazione IULM*, ed. G. Rocca, 233-245. Milan: Edizioni dell'Orso. 査読無.

④ Nishimura, Kanehiro. 2011. On the chronology of vowel contraction in Latin. *Proceedings of the 22nd Annual UCLA Indo-European Conference*, ed. S. W. Jamison, H. C. Melchert, and B. Vine, 181-191. Bremen: Hempen Verlag. 査読有.

〔学会発表〕（計６件）

① 西村 周浩.「祈り人の勇みと慎み — 古代ローマ人とマルス神 — 」. 第 3 回白眉年次報告会「白眉のコスモロジー 2013」, 2013 年 3 月 11 日, 京都大学芝蘭会館稲盛ホール.

② Nishimura, Kanehiro. "Vowel lengthening in the Latin nominal lexicon: Innovation and inheritance." 14th Fachtagung of the Indogermanische Gesellschaft "Etymology and the European Lexicon," 2012 年 9 月 20 日, コペンハーゲン大学（デンマーク）.

③ Nishimura, Kanehiro. "Vowel length in

suspīciō." East Coast Indo-European Conference, 2012 年 5 月 18 日, カリフォルニア大学バークリー校（米国）.

④ Nishimura, Kanehiro. "On the Phonological Mystery in Latin *suspīciō*: A Trick of *suspectus*?" Conference on Indo-European Linguistics, 2012 年 3 月 5 日, 京都大学文学研究科.

⑤ Nishimura, Kanehiro. "Latin *Mārs* and *Māvors*: Language in hyper-religious context." International Colloquium "Language in Religious Context: Voices from Ancient Italy." 2012 年 2 月 7 日, 京都大学次世代研究者育成センター.

⑥ Nishimura, Kanehiro. "Vr̥ddhi-like vowels in nominal forms in Latin." 23rd Annual UCLA Indo-European Conference, 2011 年 10 月 28 日, カリフォルニア大学ロサンジェルス校（米国）.

６．研究組織

(1)研究代表者

西村　周浩（KANEHIRO NISHIMURA）
京都大学・白眉センター・特定助教
研究者番号：50609807